

兼家の嘘の言い訳を求めらる道綱母の歌語り享受  
—道綱母対町の小路の女と恵子女王対好古女—

堤 和博

はじめに

『蜻蛉日記』上巻は九五四（天曆八）年夏の兼家からの求婚に始まり、やがて結婚、翌年の八月末には道綱を出産する。が、九月になると他の女に出す兼家の手紙を発見し、道綱母は早くも重い苦悩を背負わされる。本稿で問題にするのは、広くはこのあたりからである。

手紙を見つけた道綱母は、

疑はしほかにわたせるふみ見ればここやと  
だえにならむとすらむ

と、おそらくその手紙の余白に書き付けて、兼

家に不安感を伝えようとするが、これに対する兼家の反応については何も書かれておらず、引き続き十月末頃に三夜連続で兼家が訪れなかつた時があつたと記す。その女と兼家との結婚が成立したと云うのであろう。その後兼家は、「つれなうて、「しばしこゝろみるほどに」など、けしきあり。」という状態だった。（以上、（一）二）疑い）

続いて、ある夕方に兼家が「うちのかたるましかりけり」と言つて出て行つたのを不審に思つて従者に跡を付けさせ、町の小路の女の所に行つたとの報告を受ける。これで兼家の新しい結婚相手が判明する。二三日後の暁に兼家がやつて来たが門を開けさせない。兼家は退散する

が、それを「例の家とおぼしき所に物したり」と言つて、町の小路の女の所へ行つたと決め付ける。翌朝道綱母の方から兼家に歌を贈るが、それが『百人一首』等にも採られた次の有名歌である。

嘆きつゝ独り寝る夜をあくるまはいかに久  
しきものとかは知る

兼家からは、門を開けてくれるまで待つていよ  
うとしたが、「とみなる召使の来あひたりつれ  
ばなむ」、それも叶わなかつたという言い訳と  
ともに、次の返歌を得る。

げにやげに冬の夜ならぬ真木の戸も遅くあ  
くるはわびしかりけり

そこで道綱母は次のような感懐を漏らす。

さても、いとあやしかりつるほどに、事な  
しびたり。しばしは、忍びたるさまに、「内  
裏に」など言ひつゝぞあるべきを。いとど  
しう心づきなく思ふことぞ、限りなきや。

(以上、「一三」町の小路の女)

男に通う女が複数あるのも普通だった当時、  
男の体も気持ちも他の女の所に行ってしまつて  
いると感じた時の女の感懐として、特に傍線部  
などは印象深いもので、本稿の問題の中心もこ  
こにある。

以下、論述の便宜上、傍線部の感懐を「嘘を  
求める感懐」と呼ぶことにする。

一

さて、「嘘を求める感懐」のどこが印象深い  
のかというと、やはり、他の女の所に行くのな  
ら「内裏に行く」と、せめて嘘の言い訳でもし  
て欲しいのに、それもない、という道綱母の窮  
極的な気持ちを読み取れて、それが読者の哀れ  
を誘うからであろう。それで、言い訳とせば、  
手紙の発見から「嘘を求める感懐」までを見渡  
し、兼家の言い訳が道綱母の作歌とともに軸に  
なっているようにもみえる。まずその点に注目  
して、このあたりの記事を纏めることから始め  
よう。

①手紙発見後の道綱母の「疑はし」の歌

「疑はし」の「はし」と「橋」、「文」と「踏み」がそれぞれ掛詞で、「橋」「渡す」「踏み」「途絶え」が縁語など、技巧の粋を凝らしながら兼家に心情を訴えようとしたものと思われるが、前述の通り、兼家の反応は書かれていない。

② 兼家と町の小路の女との結婚後の「しばしこゝろみるほどに」の兼家の言い訳

直前の「つれなうて」を兼家の発言に含める説や、脱文を想定する説まであるが、大筋としては、「貴女の様子を暫く窺ってみようと思っていて」などという不参の言い訳とつてよいであろう。

③ ある夕方の「うちのかたるましかりけり」の兼家の言い訳

「うちのかたるましかりけり」は、宮内庁書陵部蔵桂宮本『蜻蛉日記上』からそのまま引いたのだが、例によつて意味の通らない所で、幾つかの校訂案が出されておき、代表的なものでは次の三つであろうか。即ち、

- (1) うちのがるましかりけり  
 (2) うちのかたのがるましかりけり

(3) うちのかたふたがりけり

このうち、第(2)案をとると、「宮中にどうしても避けられない用事があつて」という意味になり、第(3)案では、「(ここについては翌朝)参内するのに方ふたがりになつてしまふ」という意味になる。すぐに参内する必要があるかどうかを別にすると、両案いずれも参内を言い訳としていることになる。残つた第(1)案では、文字通りに解すると、用事は具体的に示さずに「どうしても避けられない用事があつて」と言っているだけになるが、これも用事として具体的には参内を暗示していると受け取れる。従つて、どの校訂案をとつても、兼家は参内を言い訳にして道綱母の所から出て行こうとしたとみてよからう。一方、道綱母はそれを嘘だと思ひ、たまらずに従者に跡を付けさせたのだ。

④ 兼家を追い返した翌朝の「嘆きつゝ」の道綱母の歌

「疑はし」の歌と比べて、技巧は「(夜が)明ける」と「(門を)開ける」の掛詞しかないようだが、それが却つて道綱母の心情を強く感じさせるものとなっている。「技巧をこ

えて、内容の訴える意味が、最も直截に人の心をうった」という川口久雄<sup>7</sup>氏の評に賛同する。

⑤「嘆きつゝ」の歌の後の兼家の「とみなる召使の来あひたりつればなむ」の言い訳と「げにやげに」の歌

「召使」は、諸注指摘するように、太政官の下級役人であろう。従って、宮中から急に呼び出しがあり参内したことを、門を開けてくれるまで待っていなかつた言い訳としていゝる。一方の歌の方は、道綱母の歌の掛詞を襲つており、返歌の体は成しているが、はぐらかしとしか感じられない。「道綱母の切実な歌の修辭をとらえて、冗談めかしく返事をし、返歌をしている。」「作者がせめて切ない胸中を訴えようと詠んだ和歌さえも、兼家によつてはぐらかされてしまう応酬のむなしさ。」と新編全集も評している。

その後先程引いた「嘘を求める感懐」を含む部分があり、記事は翌年三月の桃の節句の時の話（「一四」桃の花）にとぶ。

このようにあらためて纏めてみると、自分の

切実な気持ちと、それをまともには受けようとせず、に言い訳をしたりする兼家の態度との落差を、道綱母は強調せんとしているようだ。その切実さがある時は歌に託すが、それも兼家のはぐらかしにあつたりする。また、兼家の言い訳については、③でのそれを信用していないのは言を俟たない。②でも町の小路の女の所に行つていゝると思つていゝるわけだから信用してない。⑤も直後の「さて、いとあやしかりつるほどに、事なしびたり。」という言辭をみると信用してないようだ。そして、信用できない言い訳すらもなくなり、窮極的とも言える「嘘を求める感懐」が吐露される。

この「嘘を求める感懐」を吐露する道綱母の気持ちについて、例えば「蜻蛉日記注解六」<sup>10</sup>は、次のように解説する。

たとい偽りとわかつていゝても、参内などにかこつけてくれるならば、そこにはせめて彼女の傷ついた感情へのいたわりと尊重とがあると思つて、いくらかでも心を和らげることができるとある。作者の表現したいのは、大体こんな意味だと思ふ。

道綱母が「表現したいのは」なるほどこの説明で尽きていると思う。しかし、私は、もし兼家

が嘘の言い訳を続けていたら実際のところどうなっていたであろうかを問題にしたい。それは想像するしかないのだが、本当に自分の「傷ついた感情へのいたわりと尊重とがあると思つて、いくらからでも心を和らげることができ」たであろうか。③や⑤あるいは②も含めて兼家の言い訳を信用していない道綱母なのだから、やはり嘘の言い訳を続けられたとしても、「傷ついた感情へのいたわりと尊重とがある」とは思えなかつたであろうし、従つて、「心を和らげることができ」たとも到底思えない。つまりは、③や⑤での態度と「嘘を求める感懐」とは、いわば矛盾しているのである。従つて、⑤の後で「嘘を求める感懐」を漏らしたことの問題は大きいと言わなくてはならない。

本稿は、直前の態度とは矛盾したこの窮極的な感懐を吐露しなければならなかつた道綱母の心境とその背後にあるものを探ってみるものである。

## 二

最初に、言い訳の問題から考えたい。男が女の所に行けなかつたり、せつかく女の所に行つ

ても、そこから早々に出掛けなくてはならなかつた時に、何らかの言い訳をするのは、一般的に考えて当然のことで、その際、参内を言い訳にすることも多かつたに違いない。兼家も中巻の天禄元（九七〇）年十二月七日に「いで、日暮れにけり。内裏より召しありつれば」と言つて道綱母のもとから出て行つたまま、十日以上も不参を続けている（（「九八」胸のほむらにわく涙）。しかし、男の言い訳が本当の事かどうかにか拘わらず、女の方からすると、道綱母のように、それを信じられない場合も多かるう。そこでまずは、他にも見られるそのような例をみてみる。

『信明集』101番<sup>1)</sup>には、女の所から早朝早々に信明が参内してしまつた翌朝、女から贈られた歌がある。

うちへいそぎまゐりたるつとめて、女  
いそぎけん心のうちをしらぬかなもしも  
しきに床やさだむる

女の反応をみると、信明が宮中に出仕したこと自体は信じているようだが、そこに別の女がいるのではと疑っている（波線部）。「勤務に忠

実に出仕した男のあまりの朝の早さに、女が不安を抱いた」とは、平野由紀子氏の評である<sup>(159)</sup>。ちなみに、続きには残念ながら「かへしあるべしとか」としなくては、信明の返歌を欠いている。

また、時代は少し下るが、『定頼集』159 160 番<sup>(160)</sup>には、女の里で女と逢っていた定頼が、宮中の宿直勤務を理由にそこから出て行ってしまった翌朝の贈答がある。

さとなりしに、こよひはうちのとのゐ  
とていで給ひしを、れいの所にやと思  
ひしかはつとめてきこえし  
うちははしかさぬるとこはなになれや返し  
わびつるよはのさ衣 (159 番)

返し

かへすとはきこえぬものをから衣かさぬと  
きくぞまさるぬれきぬ (160 番)

この例では、女は定頼の宮中宿直そのものを疑い、いつもの女の所に行ってしまったのではないかと勘繰っている (159 番波線部)。対して定頼は、返歌でそれを否定しているわけだ (160 番波線部)。

さて、両例ともに、女が、男の宮中勤務の言い訳の裏に、別の女の存在を疑っているのが目に付く。男に通う女が複数いるのも普通だった当時であるから、これは女の当然の心理である。

もう一例、男の言い訳があるわけではないが、『後撰和歌集』巻十一・恋三・717 番 (以後、『後撰和歌集』は『後撰集』とする) にある例もみ

内にまりてひさしうおとせざりける  
をとこに をんな  
ももしきはをののえくたす山なれや入りに  
し人のおとづれもせぬ

詞書が簡単で男の返歌もないので詳細は分からないが、宮中に出仕したまま音信もない男 (詞書波線部) に対して、晋の王質の故事を引きながら (歌波線部) 皮肉たつぷりの歌を歌いかけていることからすると、女は、『信明集』の例同様、別の女の存在を疑っているらしくも思える。

これらの例と道綱母の場合を引き比べてみると、いずれも女の方は男が別の女と逢っている

のではないかと疑っているというレベルにとどまっているようだ。一方の道綱母は、疑いというようなものではなく、手紙を見つけてからは当然他の女の存在を確信しており、しかも、兼家の跡を付けさせた従者の報告以降は、相手の女を町の小路の女に特定できている、兼家が町の小路の女の所に行っていると決め付けている。その点、ここでの道綱母の場合は特別だとも言える。

## 三

それで、道綱母の心境を考える上でもう少し参考になるような例はないかと言うと、実は、『後撰集』717番の異伝が兼家の兄伊尹の私家集『一条摂政御集』66番<sup>14</sup>にあり、それが看過できない例なのである。66番に至る前の状況を示したいことなどもある<sup>15</sup>ので、65番から引いておく。<sup>15</sup>（点線部については、第四節で触れる。）

おほんとの、きたのかたきこえたまけるに、「御かへりなし」とて

つくまえのそこひもしらぬみくりをばあさ  
きすぢにやおもひなすらん（65番）

そのほどのことゝもおほかりけれど  
かゝず。  
あひたまでの中に、やないしのもとこ  
もりおはして、「うちにく」とある  
に、きたのかた  
もゝしきはをのゝえくたす山なれやいりに  
し人のおとづれもせぬ（66番）

これらによると人間関係や状況がかなり特定できる。つまり、「おほんとの」（伊尹）が「きたのかた」（恵子女王）と関係を結んでから、恵子女王はそっちのけで「やないし」（野内侍、即ち、小野好古女）の所にいながら宮中勤務だと嘘の言い訳をし続けていた時に、恵子女王から伊尹に贈られた歌になる。すると、『一条摂政御集』66番の場合は、夫兼家が町の小路の女という特定の女の所へ確実に行ってしまっている道綱母の場合とよく似た点を持つと言え<sup>16</sup>る。しかしこの場合も、伊尹が「うちにく」と言い訳をし続けているのが、いつしか言い訳すらもしなくなってしまう兼家の場合と決定的に違う。

このように『一条摂政御集』66番の場合は、これまでに挙げた例よりも今問題としている道

綱母の状況と似た面も持つ一方、決定的に違う面もあるのであるが、さらに細部について考察しておきたい。

まず『一条撰政御集』66番の状況では、好古女の所に「こもりおはして」いた伊尹に歌が贈られていたのだから、歌が届けられたのも好古女の家になる。すると、恵子女王は、伊尹が好古女の所にいるのは承知、伊尹の嘘はお見通しの上で詠歌しているのが分かる。ならば、反対に伊尹からすると、本気で恵子女王を騙そうとしていたのではなく、恵子女王が事実を知っているのを分かった上で、敢えて嘘を吐いているのではないかと類推される。いわば、当時の一種の男の礼儀のようにも思うのである。伊尹からすれば、たとえ恵子女王が事情を分かっていたとしても、好古女の所に行きたいので貴女の所には暫く行けません、などと言えははずはなく、そこは、宮中での仕事が続いていますなどと適当に取り繕っておく。すると、女の方でもそういうことしておく程度は体面が保てたりしたのであろう。また、自らを慰めることになつたのかも知れない。勿論、それで女の方の気持ちがいとも治まるとは限らない。嫉妬や怒りの炎が消えない場合もあるが、いずれ

の場合も、自分の気持ちを歌でもって伝えるのが、女の嗜みであつたのだらう。別の女の存在を確信するまでには至っていない『信明集』や『定頼集』の例にも、それは当て嵌まるであらう。

それはともかく、ここまで考えてくると、道綱母の「嘘を求め感懐」について、「たとい偽りとわかつていても、……」と解していた「蜻蛉日記注解六」の見解が思い出されてくる。恵子女王の場合は嘘の言い訳を続けられてどういう気持ちになつたかは分からないが、今やあからさまに町の小路の女の所へ通つていく（と道綱母は思つていた）兼家の姿を目にしなくてはならなくなつた道綱母が、状況として求めたのは、せめてもの思いで求めたのは、『一条撰政御集』66番のような状況ではなかつたか。そして、そういう状況ならば「（自分の）傷ついた感情へのいたわりと尊重とがあると思つて、いくらかでも心を和らげることができらるであらうのに」と考えたのではないか。しかし、その前の③や⑤で既に兼家の言い訳が信じられなくなつていた道綱母であつたことを考えると、もし嘘の言い訳を続けられても、心を和らげることができなかつたであらうと、前述の通り考えら



れるのである。こうして③や⑤における態度とは矛盾する窮極的な「嘘を求める感懐」が漏れたのではないか。

作歌の問題も大きい。恵子女王や信明の相手の女、また定頼の相手の女もそうであったように、たとえ嘘だとしても何らかの言い訳をされれば、それに合わせて歌を贈ることができる。前述の通り、それが当時の女の嗜みでもあったのだらうが、道綱母の場合は嗜み以上のもので、特に上巻のこのあたりにおいては、作歌することとが大きな心よりどころであったらしく、その格好の一例が「嘆きつゝ」の歌だとも言える。が、技巧を凝らした「疑はし」の歌も、感情をほとんど直截に詠み込んだ「嘆きつゝ」の歌も、兼家のはぐらかしにそれぞれあつてしまい、道綱母は兼家に歌を詠みかけ<sup>16</sup>る気力もなくしつゝあつたと見受けられる。それでも、恵子女王のように何らかの言い訳をされれば、それを題材に、あるいは切っ掛けに歌を詠むことができたかも知れない。でも、当たり前のように黙って町の小路の女の所へ行く兼家の姿を見ては、歌も詠めない。「嘘を求める感懐」は、歌さえも詠めないでいる道綱母の悲痛な訴えとも読めてくる。一方、『後撰集』717番の例を参考にする

と、女は「ひさしうおとせざりける」男にも歌を贈っている。勿論こんな場合でも歌を贈る女もいたわけで、ここでの歌も詠めない道綱母の痛手がより鮮明になつてこよう。

というように、主として『一条摂政御集』66番の恵子女王の状況を参考にすると、「嘘を求める感懐」を吐露する道綱母の心境もより鮮明になつてくると思う。それで、道綱母がたえ『一条摂政御集』66番を直接に享受していなかったとしても、一般に他にも見られたであろう恵子女王のような立場から<sup>17</sup>漠然と影響を受けたとも考えられる。しかし、『一条摂政御集』66番を道綱母は直接享受することがあつたとすれば、今試みた説明がより明確になされるであろう。では、道綱母は『一条摂政御集』66番を享受したのか。夫兼家の兄の私家集に載った歌だから、享受した可能性が大であるのは間違いないが、享受したとすれば、どのような形であつたのだらうか。次にその可能性を探つていきたい。

#### 四

この問題を考えるにあたっては、何はともあ

れ、『一条撰政御集』66番と『後撰集』717番の  
 關係をどう捉えればよいのかから考え始めるの  
 が有効であろう。両者の關係につき、『一条撰  
 政御集注釈』<sup>18</sup>は、

後撰集の撰者には、勿論この歌が撰和歌所  
 の別当である伊尹の北の方の歌だとわかっ  
 ていたであろう。それを「をんな」として  
 のせたことについては、さまざまの理由が  
 推測されるが、もつとも考えられるのは、  
 恋の部に入っている歌でもあり、特定の個  
 人の歌を一般化し、物語化したものと解す  
 ることであろう。

と説明する。が、それに対し私は逆の考え、即  
 ち、『後撰集』717番を利用して歌語りが創作さ  
 れたのが『一条撰政御集』66番の形であり、さ  
 らに、歌語り化されたのは66番だけではなくて、  
 『一条撰政御集』に載る恵子女王関連の歌すべ  
 てに当て嵌まるのではないか、との考えを旧稿<sup>19</sup>  
 で示している。旧稿では『一条撰政御集』の他  
 撰部分に関する問題に関心の中心があつたの  
 で、ここで改めて、本稿における道綱母の「嘘  
 を求める感懐」の問題との絡みから再考してお  
 きたい。よって、(前節の記述も含めて)旧稿  
 の記述と重複する部分も多くなることをご了承

願いたい。

最初に、『一条撰政御集』に載る他の恵子女  
 王関連の歌も見ておく。

はやうのことなるべし。きたのかたと  
 ゑじたまで、「さらにこじ」とちがご  
 として、ものどもはらひなどして、ふ  
 つかばかりありて

わかれてはきのふけふこそへだてつれちよ  
 しもへたるこゝちのみする(101番)

御かへり

きのふとも今日ともしらずいまはとてわか  
 れしほどの心まどひに(102番)

「かゝるをりにや」とて、しふにいり  
 てありし。

ちかひてもなほおもふにはまけぬべしたが  
 ためをしきいのちならねば(103番)

また、きたのかたと「かぎりのたび」  
 どておはしけるみちより

ゆくさきをおもふ心のゆゝしさにけふをか  
 ぎりといふにざりける(106番)

やだいにのいへにひさしうおはせ

ねば、うへ  
ねぎめするやどをばよきてほとゝぎすいかなるそらにか(170番)きねなくらん(170番)

次の三首は伊尹と「あどの」との贈答であるが、恵子女王も関係しているので挙げておく。

このおとど、きたのかたとゑじたまで、  
よかはにて、ほうしにならむとしたまふに、ほうしゝて、あどの

みをすてゝこゝろのひとりたづぬればおもはぬ山もおもひやるかな(184番)

おとど、かへし

たづねつゝかよふ心しふかゝらばしらぬ山  
ぢもあらしとぞおもふ(185番)

又、あどの

なよたけのよかはをかけていふからにわが  
ゆくすゑのなこそをしけれ(186番)

『一条摂政御集』に載る恵子女王関連の歌はこれらで全部なのだが、参考のために挙げた184番も含めてすべてが66番同様、二人の仲が順調でなかった頃のものばかりなのが分かる(各詞書の波線部)。前節で引用した65番も二

人が結婚する前で、伊尹がまだ恵子女王から返歌を得られなかった頃のものである。また、65番、66番でも贈答が成り立っていなかつたように、二人の間で贈答が成り立っているのが、101番、102番だけなのも気に掛かる。しかも、65番、66番が結婚成立前後の頃、101番の贈答は「はやうのことなるべし。」という二人の仲の発端近くと思われるもので、184番、186番の贈答は、伊尹が本気ではないにしろ、「ほうしにならむとしたまふ」というのだから、晩年乃至は晩年近く、少なくともかなり年齢を重ねてからである。つまり、長年月に渡る二人の不仲の頃の歌ばかりが挙げられているのである。

それに関連して、前節で引用した65番後書(点線部)が問題になる。なぜここでこのような断り書きが必要であつたのか。そう思ってこの後書でもって省略されている内容を考えてみると、65番詞書の(恵子女王の)「御かへりなし」という状況から66番詞書冒頭の「あひたまてのち」という状況に至る迄が省略されているわけだから、恵子女王が伊尹に心を寄せていく間の経緯であるのが分かる。『蜻蛉日記』で言うと、兼家の求婚時から暫くはその略式な求婚方法に慥然とした思いに道綱母がなり、返歌する気さ

えなかなかしなかつた状態から、結婚成立後「思ふことおほるの川のゆふぐれはこゝろにもあらずなかれこそすれ」と詠歌するようになる（「〔五〕結婚」ところである。『一条摂政御集』では65番後書でそのようなところが略され、66番の伊尹が恵子女王をほつておいて好古女にうつつを抜かしている時の歌となっているわけだ。

これらのことを勘案すると、『一条摂政御集』に載る恵子女王関連の歌は、伊尹と恵子女王との仲が順調でなかつた頃にテーマが絞られて纏められた歌語りが、ばらばらになって収載されたものだと考えられる。すると、65番後書は、テーマから外れる一人の蜜月時代の遣り取りを、物語的省筆を装って省略したものと見なせるのである。挙例は控えるが、このような断り書きは、歌物語には実際によく見られるものである。

加えて、次のようなこともある。まず、65番は、誰に贈ったかは明示されない伊尹の歌として138番に重出している。これは、別の機会、別の女に贈った歌を恵子女王に贈ったものに仕立てたものとも考えられる。また、103番には変わった詞書（二重線部）が付いているが、これは、

103番と同じ歌が『後撰集』巻十二・恋四・886番に詞書・作者名を「よしふるの朝臣に、さらにあはじとちかごとをして、又のあしたにつかはしける 蔵内侍」として載せられているのを意識していると思われる。つまり、実は別人の歌なのだが、もとの「しふ」（集）に「かゝるをりにや」との詞書で入っていたことを断っているのである。これも、他人詠を利用して伊尹と恵子女王の歌語りを仕立てようと試みた痕跡かも知れない。そして、問題の66番も『後撰集』717番では「をんな」の歌となっているのである。以上総合して考えると、伊尹と恵子女王の歌語りが創作されるにあたっては、他人詠なども利用しながら、かなり虚構が加えられた可能性が大きい。よつて、66番に関しても、『後撰集』717番に載る人口に膾炙した歌を恵子女王詠に仕立てて創作されたものとみる、『一条摂政御集注釈』の想定とは逆の方向が考えられる。さらに言っておくと、『後撰集』では、717番の次の718番が、左に示したように伊尹の歌になっている（『一条摂政御集』35番にも）。

女のもとにきぬをぬぎおきて、とりにつかはすとて  
これまさの朝臣

すずか山いせをのあまのすて衣しほなれた  
りと人やみるらん

よって、『後撰集』718番の伊尹の歌の直前の何者とも知れない女の歌(717番)をもとに、伊尹と恵子をめぐる歌物語が創作されたということもあり得るであろう。また、自作ではなく他人詠を贈りつけることが当時よくあったが、恵子女王自身が、今となつては何者とも知れない「をんな」の歌を、宮中勤務だと嘘を吐きながら好古女の所に入り浸っている伊尹に贈りつける事実があつたとも考えられる。

ところで、『一条摂政御集』の他撰の部分の成立は何段階もあつて複雑で、これについても考察したことがある<sup>(2,3)</sup>。それと併せて伊尹と恵子女王の歌語りがどのような経緯を経て今日の『一条摂政御集』に載せられるに至ったか、大雑把な考え(大雑把なところしかわかりようがないのだが)を示しておく。

- (I) 伊尹と恵子女王の実際の仲・歌の贈答。  
(II) (I)に他人詠も加えられたりして虚構化され、歌語りが創られる。  
(III) (II)がある程度は流布する。

- (IV) (II)から二人の不仲の時にテーマが絞られる。  
(V) (IV)がばらばらになって、『一条摂政御集』の他撰の部分成立の各段階で収録される。

先述の通り旧稿は『一条摂政御集』の成立に関心の中心があつたため、(IV)(V)あたりに注目し、(I)や(II)の段階については十分に論及しなかつたので、ここで補足的に私の考えを示しておく。

(I)についてはほとんど言うまでもないが、先にも触れた蜜月時代も含め二人の仲には紆余曲折があり歌も様々交わされたであろう。(I)を題材あるいはモデルとして(II)で歌語り化されたとすれば、この段階では様々なテーマの歌語りが創られたであろう。また、(II)でも様々なテーマの歌語りが流布したと思われる。それが『一条摂政御集』に取り込まれる前の段階の(IV)で二人の不仲であつた頃にテーマが絞られ、それがばらばらになり、(V)で『一条摂政御集』に取り込まれ、その他は散逸してしまつたのであろう。

66番をこのような流れの中におき、66番の異伝が『後撰集』717番にあるのを考えると、繰り返しになるが、66番は(I)における伊尹と恵子女王の現実の仲をもとに、(II)で歌語りとして纏め

られたものと見なされる。恵子女王が「もゝしきは」の歌を詠んだのは、全くの虚構かも知れないし、恵子女王自身が他人詠を利用した事実があつて、それを下敷きにしたのかも知れない。いずれにせよ、その歌語りが(Ⅳ)においても残され、(Ⅴ)で『一条摂政御集』の他撰の部分に載せられたわけだ。

## 五

問題を道綱母に戻す。伊尹と恵子女王は、『一条摂政御集注釈』によると、天曆四(九五〇)年までには結婚しているから、今問題としている九五五年の段階で、少なくとも『一条摂政御集』65番や66番に載る歌語りが道綱母に届いていた可能性がある(Ⅲの段階で)<sup>2, 4</sup>。前年夏に道綱母は兼家と結婚しているから、それ以降なら兼家の兄伊尹と恵子女王との歌語りが道綱母の耳に入つても不思議はない。それ以前なら、撰関家や女王の歌語りが受領階級の娘の道綱母にまで届くことが容易にあつたであろうかとの疑問も出よう。しかし、醍醐寺五重塔初層の天井に書かれてあるのが見つかった落書から、当時の歌語りは、絵所の画工など、貴族の枠をも越

えてかなり広まっていた様相がみてとられてい<sup>2, 5</sup>る。伊尹や恵子女王の歌語りが、兼家と結婚前の道綱母の耳に届いた可能性も大きいと考えられる。

すると、道綱母が道綱を出産後に町の小路の女の出現によつて悲哀を味わっている時、かつて聞いた兼家の兄伊尹と恵子女王をめぐる『一条摂政御集』66番に載る歌語りが(あるいは65番のそれと一緒に)脳裏に甦ってきたのではな<sup>1</sup>いか。恵子女王と自分を比べると身分に大きな隔たりがあるなど、相違点も数々目に付く。しかし、結婚当初乃至は当初に近い頃から別の女の存在に悩まされる状況は似通っている。兼家の身近にこのような歌語りがあれば、強くそれを意識することがあつても不思議はあるまい。よつて、第三節の後半あたりで試みた『一条摂政御集』66番と「嘘を求める感懐」との関係についての説明は、直接の影響関係として捉えられる。ただ、道綱母もそれを伊尹と恵子女王との実際の関係をうつしたものと受け止めたものではあるまいし、この際事実であるかどうかは問題にならず、あくまでも歌語りとして享受し、自己の立場に照らし合わせて感懐にふけたものであろう。

## 六

その内容が事実であるか如何に拘わらず、歌語り（あるいは歌物語）を道綱母が意識することに関しては、やはりかつて論じたことのある別の場面を参照したい。

今問題として九五五年の翌年も道綱母は町の小路の女の存在に苦しみ続ける。そして冬になって次のように言う。

かくて、常にしもえ否び果てで、時々見えて、冬にもなりぬ。臥し起きは、たゞ、をさなき人をもてあそびて、いかにして網代の氷魚にこと問はむ」とぞ、心にもあらで、うちいはるゝ。

（「二一」網代の氷魚に）

波線部の独り言は、『大和物語』第八十九段（下の引用の★印の歌）や、『拾遺抄』卷九・雑上・421番に載る修理の歌の上句の異伝を吟いて下句を表現したものと普通説明されている引歌表現で、これが『蜻蛉日記』に見える最初の引歌表現である。『大和物語』は長くなるが、両者

を引用しておく。

『大和物語』第八十九段

修理の君に、右馬の頭すみける時、「一方のふたがりければ、方たがへにまかるとてなむえまゐり来ぬ」といへりければ、

これならぬことをもおぼくたがふれば、恨みむ方もなきぞわびしき

かくて、右馬の頭いかずなりにけるころ、よみておこせたりける。

★いかでなほ網代の氷魚にこととはむなによりてかわれをとほぬと

といへりければ、返し、

網代よりほかには氷魚のよるものか知らずは宇治の人に問へかし

また、おなじ女に通ひける時、つとめてよんだりける。

あけぬとて急ぎもぞする逢坂のきり立ちぬとも人に聞かすな

男、はじめごろよんだりける。

いかにしてわれは消えなむ白露のかへりてのちのものは思はじ

返し、

垣ほなる君が朝顔見てしかなかへりて

のちはものや思ふと

おなじ女に、けぢかくものなどいひて、かへりてのちによみてやりける。

心をし君にとどめて来にしかばもの思ふことはわれにやあるらむ

修理が返し、

たましひはをかしきこともなかりけりよろづの物はからにぞありける

『拾遺抄』卷九・雑上・421番

蔵人所に候ひける人のひをのつかひに  
まかりけりとして京に侍りながらおとし  
侍らざりければ

いかでなほあじろのひをにこととはんなに  
によりてか我をとほぬと

かつての論考においては、『大和物語』や『拾遺抄』の形を道綱母が享受した場合、あるいはそれらの前段階の歌語りを享受した場合などについて検討したので、詳しくはそちらを参照願いたい。いずれにせよ私は、道綱母は修理の歌一首を引いただけではなく、その歌を含む歌語り乃至は歌物語全体を意識したもので、その意味では引歌表現というよりも「引歌語り表現」

または「引歌物語表現」とでもいうべきものではないかと想定した。そうすると、修理の場合、相手の男に裏切られ、男が信用できなくなっている状況にあるのが大きな意味を持つてくる。即ち、『大和物語』では、最初の歌で修理は、右馬の頭に今までも騙し続けられてきて方違えの言い訳も信用できないと訴えているし（波線部）、『拾遺抄』でも、蔵人所に勤める男の氷魚の遣いに遣わされたとの言い訳を信用していない（波線部）。こういう修理の状況を道綱母も意識しているとすると、道綱母は「なにによりてかわれをとほぬと」という歌の下句だけが言いたかったのではなく、自分も修理同様兼家のことが信用できなくなったという孤独感を吐露したかったのではないか。ならばさらに、道綱母はここで自身を修理の立場に置き換えて、修理の立場に成り切って、幼子を心のよりどころにしながら兼家への不信感に耐えているのではないかと想定できる。その際道綱母は、修理の実体験には拘らず、あくまでも歌語り（歌物語）として修理の話を受け取り、我が身を修理に重ね合わせて、あるいは修理に成り切って引歌表現をしたと考えるのである。

さて、歌語り乃至は歌物語を単に享受するだ



けでなく、そこに登場する人物と我が身を重ね合わせる事が、道綱母にとって他にもあつたとすれば、その一例が『一条摂政御集』66番（あるいは65番も併せて）に載る歌語りではないか。つまり、何度も言うことになるが、町の小路の女によって苦しむ我が身と、好古女の存在によつてないがしろにされている恵子女王が重ね合わされたのではないか。具体的には、詞書の「あひたまてのちに、やないしのもとこもりおはして」という状況がまさしく自己の状況とほぼ重なってくるのである。しかし一方で、「うちにく」とあるに」というところは相違する。即ち、兼家は伊尹と違い官中勤務などと口実を設けることもなくなり、当たり前のように町の小路の女の所へ行っているのである。そして、その類似点と相違点が相俟って、窮極的な「嘘」を求める感懐を生み、主として相違点が、恵子女王には「もゝしきは」の詠歌が成し得たが道綱母には詠歌が成し得なかつたという違いを生んだのである。また、修理の歌語りを享受した時のように引歌表現も出てこなかつたことに繋がつたと思うのである。

このように考えると、引歌表現が出てくることのないの違いはあるが、歌語り（歌物語）享受の

あり方としては、修理の歌語り（歌物語）の場合も『一条摂政御集』66番の場合も同等の重みを持つていたと捉えなくてはならないのである。

『一条摂政御集』66番を享受しながら引歌表現が出てこなかつたことに関しては、「いかにして」の引歌表現が『蜻蛉日記』最初の、つまりは文献に残る限りにおいては道綱母最初の引歌表現であることも関連性があるろう。第三節でも触れたように、「嘘」を求める感懐「あたりから道綱母は兼家に対してあまり歌を詠まなくなる。この件に関しては注（16）で（「一九」小弓の矢）まで確認したが、続きも確認しておく」と、（「二〇」夜長うして）には歌はなく、（「二一」網代の氷魚に）では問題の引歌表現が出る前、時姫との贈答歌があるだけである。兼家との歌の遣り取りはやはりないのである。このように、兼家に歌を贈る気力をなくした代わりに、自己の気持ちをやるものとして引歌表現が自ずと出てきたのではないか。そう思うと、直前の（「二〇」夜長うして）には歌はないのだが、「夜長うして眠ることなれば」と白楽天の「上陽白髮人」を踏まえた記述があるのも、無関係ではないかも知れない。

それはともかく、「嘘を求めめる感懐」あたりから兼家に歌を詠みかける気の萎えてきた道綱母が、へ〔二二〕網代の氷魚に〕で引歌表現に目覚めたというよりも、へ〔一三〕町の小路の女〕で『一条摂政御集』66番を意識していたことから考えると、歌語り（歌物語）に登場する男の愛情を受けられないでいる女に我が身を重ねることをおそらく意識せずしてするようになった面をむしろ私は強調したい。そうすることによって憤懣を晴らすというか、我が身を慰めたのである。それが、『一条摂政御集』66番の場合は「嘘を求めめる感懐」に繋がり、修理の場合には『蜻蛉日記』の中での初めての引歌表現に繋がったと考えるのである。

### おわりに

さて、私は来春『歌語り歌物語語隆盛の頃―伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学―』（仮題）の刊行を予定している。『一条摂政御集』・『本院侍従集』・『蜻蛉日記』の形成過程等を追ったかつての論考をかなり書き改めたものを集めたものである。私としては、伊尹・兼通・兼家やその妻妾達を取り巻く文学圏のあり

方を見極め、そこで相互影響的によりのように作品が生み出されていったかを見据えたいと考えているもので、まだまだそれぞれの作品を個別的に扱った考察が多いが、なるべく相互関係を見据えようとした。本稿での考察は同著の内容を受け、道綱母がそれまでの自分の態度とは整合性のない窮極的な「嘘を求めめる感懐」を漏らすにあたっての背景と心境を探り、夫兼家の兄伊尹とその北の方恵子女王を主役とする歌語りを享受していた背景が心境に大きく作用しているのではないかという一仮説を提示したことになる。私が見極めようとしている文学圏全体からすれば部分的な問題であり、一見些末な問題のように思えるかも知れないが、このような具体的な問題を掘り起こして積み重ねることが、文学圏全体の究明にも繋がるものと考えられている。

### 【注】

〔1〕『蜻蛉日記』の引用は、特に断らない限り、角川日本古典文庫『蜻蛉日記』（柿本 奨氏著、一九六七年一月）により、同著の段数、小見出しを、

へ〔一三〕町の小路の女〕

のごとき形で示す。引用部分以外にも同様の書き込みがあるのは、同著の段数と小見出しである。また、傍線等は私に付した。

(2) 宮内庁書陵部蔵桂宮本『蜻蛉日記上』(上村悦子氏編、笠間影印叢刊68・一九九二年三月再版第1刷による)より引用。

(3) ちなみに、この前後で兼家の言い訳めいた言辞を探してみると、前年末、兼家が比叡山横川に参詣して雪で帰れなくなり、「雪に降りこめられて、いとあはれに恋しきこと多くなむ」という手紙を寄越してきた(「一〇」横川の雪)ぐらいである。これは、下山できない程の雪に実際にあったのは明白で、当然道綱母も素直に受け取っているので、言い訳として問題にするには当たらない。また、翌年三月の桃の節句の時、三日には訪れずに四日になってから兼家はやってきた(「一四」桃の花)のだが、その際、三日に来なかったことに関しての兼家の言辞には何も触れられていない。よって、今問題としている(「一二」疑い)、(「一三」町の小路の女)においては、兼家の言い訳の多さが際だっているのである。

(4) 「蜻蛉日記注解六」(秋山虔・上村悦子・木村正中氏著、『国文学解釈と鑑賞』27巻11号・一九六二年一〇月・至文堂)、『蜻蛉日記全注釈上巻』(柿本奨氏著、一九六六年八月・角川書店)、『蜻蛉日記解釈大成第1巻』(上村悦子氏著、一九八三年一月・明治書院)等参照。

(5) 注(4)に同じ。

(6) 『蜻蛉日記解釈大成第1巻』(注(4)参照)の語釈欄によると、『蜻蛉日記解環』は第(1)案をとっているが、「宣昭の書入に、禁裏をいふか。」とある。また、村井順氏著『かげろふ日記全評解上』(一九七八年一月・有精堂)も、第(1)案で本文をたて、「宮中へどうしても参内しなければならぬのだった!」と訳している。

(7) 日本古典文学大系『土左日記かげろふ日記和泉式部日記更級日記』(一九五七年一月・岩波書店)の「補注八」より。

(8) 新編『日本古典文学全集』土佐日記蜻蛉日記(『蜻蛉日記』は木村正中・伊牟田経久氏担当、一九九五年一〇月・小学館)を指す。

(9) 「嘆きつゝ」の歌の返歌「げにやげに」の歌については前述の通り。「疑はし」の

歌については、兼家の反応は書かれていないわけだが、少なくとももな返歌はなかったであろう。『蜻蛉日記全注釈上巻』（注（4）参照）は、「兼家はこの歌を見たに違いない。が作者の不安を黙殺したのである。」と解している。

（10）注（4）参照。

（11）歌集の引用は、特に断らない限り、『新編国歌大観』により、波線は私に付した。

（12）『信明集注釈』（二〇〇三年五月・貴重本刊行会）。

（13）『定頼集』は『新編国歌大観』の第三巻と第七巻に所収されているが、一類本定家本系統前田家旧蔵本を底本とする第三巻より引用した。ちなみに、定家本系統では、137番から「一七四番までの三八首は、定頼と親交をもったある女房の手記の形で綴られている」（森本元子氏執筆『新編国歌大観第三巻』解題より）。

（14）『一条摂政御集』は、冒頭から41番迄が伊尹自作と目される歌物語的部分で、42番以下が他撰である。『一条摂政御集』から本稿で取り上げる和歌は、いずれも他撰の部分に含まれている。

（15）『一条摂政御集』の引用は、孤本益田家旧蔵伝西行筆本により、私に句読点、濁点等を付したが、益田家旧蔵本につき、私に実際に見たのは、一九三七年松かけ会発行の複製本の一九五八年再版本である。その際、益田家旧蔵本はかなり読みづらい字体であるので、『私家集大成』・『新編国歌大観』・『一条摂政御集注釈』（平安文学輪読会著、一九六七年一月・塙書房）等の翻刻を参考にした。なお、益田家旧蔵本では、「たまふ」のウ音便形は、「う」を表記しない形（「たまた」など）になっている。また、傍線等も私に付した。

（16）この後の『蜻蛉日記』の記事の中での道綱母の歌を追っていくと、今問題としている箇所次の（「一四」桃の花）では、三月三日の桃の節句に待ちぼうけをくらい、翌日やって来た兼家を前に、道綱母が「心たゞにしもあらで、手習ひにし」た歌を「隠しつるけしきを見て、奪ひ取りて」兼家が返歌をする。作歌はしているが、まともに兼家に贈ろうとはしていない。次の（「一五」姉の別居）では姉の夫藤原為雅との贈答歌だけ、（「一六」時姫と歌の贈答）で

は時姫との贈答歌だけがある。さらに、  
 〈「一七」秋色〉では、道綱母の独詠歌を  
 侍女が兼家に伝えたので、兼家・道綱母の  
 順で贈答歌が交わされる。ここでも積極的  
 には兼家に歌を詠みかけていない。〈「一  
 八」倒るるに立ち山〉では道綱母の機嫌の  
 悪さに早々に立ち去る兼家を見た隣人の歌  
 があるだけで、〈「一九」小弓の矢〉で、  
 小弓の矢を届けるように手紙を寄越した兼  
 家に、

思ひ出づる時もあらじと思へどもやと  
 いふにこそ驚かれぬれ

と歌を贈っている。ここでやっと兼家に歌  
 を贈っているのである。『蜻蛉日記』に載  
 る記事を追う限りにおいては、「疑はし」  
 の歌、「嘆きつゝ」の歌と続けて兼家に歌  
 を贈った道綱母だが、その後歌を贈る気を  
 無くしていき、それはなかなか回復しな  
 かったと見受けられる。

(17) 後に取り上げる『拾遺抄』421番の本文で  
 も、男(蔵人所に候ひける人)の言い訳の  
 内容は違うが、男が嘘とばれるのは判って  
 いながら嘘の言い訳をして不参をきめこ  
 み、それに対して女(修理)が贈歌してい

るともとれる。

(18) 注(15)参照。『一条摂政御集注釈』の  
 見解にはたびたび言及するが、その際は注  
 を付けない。

(19) 『一条摂政御集』部分的小考四題(『言  
 語文化研究徳島大学総合科学部』11・二〇  
 〇四年二月)。この論文では、歌語りが創  
 作されたり、後に述べるようにテーマが絞  
 られたりしたのは、恵子女王側ではなかつ  
 たかという想定も示したが、本稿の問題点  
 とはほとんど重ならないので、その点はこ  
 れ以上触れないでおく。

(20) 「やだいに」(『野大式』)は66番に出た  
 好古女の父親小野好古を官職名で呼んだも  
 の。従って、ここでも伊尹は好古女の所に  
 入り浸っている。

(21) この「ほうし」は普通名詞ではなく、伊  
 尹と「みどの」との間に来た子と思われ  
 る。詳しくは『一条摂政御集注釈』参照。

(22) 『一条摂政御集』に載る恵子女王関連の  
 歌をみていくと、小野好古家がたびたび問  
 題になってくる。これについては、拙稿「歌  
 語りから」とよかげ」の部へ『一条摂政  
 御集』の好古女関連歌を中心として—

(『語文』58・一九九二年四月) 参照。

(23) 注(22) 論文及び、「『一条撰政御集』の他撰部についての一考察—詞書を中心として—」(『詞林』8・一九九〇年一〇月)、「本院侍従の歌語り—道綱母を取り巻く文壇—」(伊井春樹先生御退官記念論集刊行会編『日本古典文学史の課題と方法漢詩和歌物語から説話唱道へ』二〇〇四年三月・和泉書院)。

(24) 先程可能性を指摘したように、『一条撰政御集』66番の歌語りが『後撰集』718番・718番の並びとの関連で創作されたのなら、当然それは『後撰集』流布以後になる。『後撰集』がいつから流布したかは分からず、九五五年以降であるかも知れないが、『一条撰政御集』66番の歌語りは『後撰集』の並びとは無関係に創作された可能性も勿論あるのであり、この問題についてはこれ以上深入りするのは避けておく。

(25) この落書と歌語りとの関連性については、藤岡忠美氏の研究発表「醍醐寺五重塔の落書きの和歌—伊勢などの数首をめぐって—」(中古文学会関西西部会第13回例会・二〇〇六年六月一〇日)より大きな刺激を受

けた。その他主な先行論文として、伊東卓治氏「初層天井板の落書」(高田修氏編『醍醐寺五重塔の壁画』一九五九年三月・吉川弘文館)、関根慶子氏「醍醐寺五重塔初層天井板落書中の一首と伊勢集」(『中古私家集の研究』一九六七年三月・風間書房)、関根慶子氏「伊勢・伊勢集の享受に関する二題」(関根慶子博士頌賀会編『平安文学論集』一九九二年四月・風間書房)、加藤雄一氏「歌語りの実際と伊勢の歌」(伊井春樹氏編『古代中世文学研究論集第三集』二〇〇一年一月)がある。

(26) 「蜻蛉日記」上巻の最初の引歌表現—いかにして網代の氷魚にこと問はむ—(伊井春樹氏編『古代中世文学研究論集第一集』一九九六年一〇月・和泉書院)。

(27) 『大和物語』の本文でも『拾遺抄』の本文でも道綱母の引歌表現とは初句が異なるわけだが、これについては、品川和子氏が「蜻蛉日記と和歌」(『一冊の講座蜻蛉日記』一九八一年四月・有精堂。後、「和歌と和歌的表現」として、『蜻蛉日記の世界形成』一九九〇年七月・武蔵野書院に所収)で、道綱母が『大和物語』を読んでこの引

歌表現を行った可能性を見据えながら、「日記の初句「いかにして」は『大和物語』では「いかでなほ」となっているが、そのあと二首おいて次の和歌の初句は「いかにして」なのである」と述べ、道綱母の記憶の混乱から初句が変化した可能性を示唆している。

(28) 『大和物語』の引用は、新編日本古典文学全集『竹取物語伊勢物語大和物語平中物語』(『大和物語』は高橋正治氏担当、一九九四年一二月・小学館)により、波線は私に付した。

(29) 『新編国歌大観』本(宮内庁書陵部蔵本)では作者名を欠くが、群書類従本・静嘉堂文庫本により作者は「修理」とみられる。